無二

日常は日高山脈の麓に。

日高山脈を語るマガジン
Hidaka Mountains Magazine

十勝・日高山脈観光連携協議会

無二

日常は日高山脈の麓に。

朝起きて窓を開けて、日高山脈を眺める。
1日が終わり、帰り道、日高山脈を眺める。

十勝には、日高山脈を眺める暮らしがあります。
暮らしにはそれぞれのストーリーがあり、ストーリーの数だけの日高山脈の姿があります。

全長150キロの雄大な山々を、
それぞれの角度から眺める6人。
一人ひとりの日高山脈との
ストーリーと思いを綴りました。

提供：山崎志津子

CONTENTS

04 芽室町 高野 竜二さん
この場所で生きていけることが幸せ

08 帯広市 谷水 亨さん
日高山脈は生き様を表す

12 中札内村 須賀 裕一さん
生まれ育った場所が好きだから

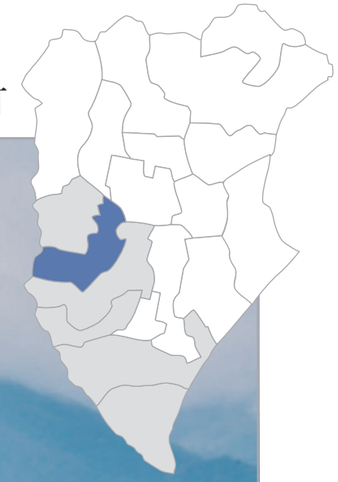
16 広尾町 白幡 定さん
遊び場として、
ここより最高なところはない

20 大樹町 有岡 繁さん
砂金から辿り着いた、
日高山脈の面白さ

24 清水町 斉藤 真さん
季節を感じる、
ヤギたちとの暮らし

28 日高山脈を眺める
無二の日々

芽室町



この場所で生きていけることが幸せ

小さい頃から当たり前にあるもの。その魅力に気付くのはなかなか難しいことではないでしょうか。日高山脈の麓にある芽室町で、農業を営む高野竜二さんもその1人。今では「この場所で生きていけることが幸せ」と語る高野さんも、東京の大学に進学するまでは地元に帰る想定はしていなかったと言います。地元に戻る選択をした背景にはどんな出来事があったのか、そして、この土地に暮らすことの幸せとはどのようなものなのか、お話を伺いました。

高野農場

高野　竜二

Takano Ryuji

1992年、芽室町にある、高野農場の次男として生まれる。大学進学を機に東京で暮らしはじめたことがきっかけで、故郷である十勝の魅力に気付いて24歳のときにUターンを決意。大学を卒業後にニュージーランドにワーキングホリデービザで9ヶ月滞在した後、実家の高野農場に就農した。

提供：亀田 晃幸

日高山脈の麓にある芽室町で、兄と2人で畑作をしています。43ヘクタールの農地で育てているのは、じゃがいも、小豆、小麦、ビート、長芋、スイートコーン、ときどきかぼちゃ。3年前からはポップコーンの栽培も始めました。高野農場はもともと、祖父が本家から分家して立ち上げたもので、僕たちの代で3代目になります。たった5ヘクタールしかなかった農地から、じいちゃんや父さんたちが必死で農業に打ち込んできてくれたおかげで、ここまで大きくなりました。

1956年当時は土を耕すときに小さいトラクターを使える農家は1、2軒で、馬を使う農家がほとんどだったみたいです。今でも昔の馬蹄が土の中から出てくることもあります。近隣農家の中でも特にお金がなかったわが家は、馬で土を耕すのはもちろん、牛を飼って酪農（牛乳）も兼業することで収入を補っていたとか、ホタテの貝を皿にしていたとか、そうした苦労話を小さい頃から聞いてきました。ちなみに、じいちゃんは93歳なのですが健在で、今も手先を動かす作業を手伝ってもらっています。

もともとは兄が農場を継ぐことになっていて、僕自身は農業をするつもりはなかったのですが、大学進学のタイミングで東京に出てからは、帰省のたびにこの環境の素晴らしさを再認識して。「この土地で自分でもなにかやりたいな」と思ったときに、実家の農業に携わりたいという気持ちが強まって、24歳のときにUターンすることにしました。今は兄と僕の2人がメインで、畑作に日々向き合っています。

仕事柄、朝早く外に出ることが少なくないんですけど、秋は紅葉で山が赤くなるのがきれいですし、冬は雪が覆った真っ白な芽室岳に朝日が当たって赤く光る風景なんて、きれいすぎてもう言葉にならないですよね。季節によっても、時間帯によっても、山はいろんな顔を見せてくれます。ただ、そう思うようになったのは、やっぱり大学進学のタイミングで東京に出てからで。小学生の頃から朝早くスクールバスに乗って登校していましたし、小さい頃からずっと知っている景色だったはずなんです。でも、だからこそ地元を離れるまでは特に特別感を抱くことなく過ごしていたんだと思います。

ニュージーランドで気付いた、自然の遊び場の見つけ方

この土地への向き合い方が変わったきっかけとしては、大学を卒業してすぐに、ニュージーランドに行ったことも大きかったです。父が所属している土壌研究グループの博士がニュージーランドに住んでいると聞いていたので、会いに行ってみたいなと思っていました。

ニュージーランドのアオラキ／マウント・クック国立公園

ニュージーランドでは、農業にはまったく関わらなかったんですけど、羊牧場でファームステイをしたり、世界遺産のマウント・クックという山でネイチャーガイドとして日々、自然と向き合いながらガイドしていたことで、山や自然が随分と身近に感じられるようになって。近場のなんでもないような岩場がボルダリングできる場所として知られていたり、近郊の山々に登り方や難易度の説明が書かれたガイドマップが用意されていてレベルに合わせて登れるようになっていたり。地元の方が自ら遊ぶなかで開発されたアクティビティがたくさんあるんですよ。日本のようにアミューズメントパークやエンターテインメントがたくさんあるわけではないんですけど、自然のなかから遊び場を発掘するのが上手な人が多いので退屈しないんだろうなと思いました。

そういった目で地元の景色を改めて眺めてみると、僕の家の近くには剣山もあるし、美生（びせい）川などの楽しい遊び場もある。芽室町内の美生ダムの近くにライフジャケットを着れば泳いで遊べるような流れのゆるやかな深みがあるんですが、ここも遊び場になるんじゃないかと思いました。冬になったら、バックカントリーに慣れている上級者は日勝峠の熊見山でスノーボードもできますよね。地元でも、もともと家族で剣山に登ったり、川で遊んでいたりしてはいたんですけど、「十勝でもこうやって遊べばいいんだ」と自分で遊び場を探せるようになったことが、ニュージーランド滞在の大きな収穫の1つでした。

小さい頃は車がなかったので行動範囲が限られていましたけど、今は自分でどんどん開拓できる。子供がまだ小さいので地元に戻ってきた当初と同じようにはいかないですけど、もう少し大きくなったら子供を連れて、山や川で一緒に遊びたいですよね。僕の密かな夢は、芽室の嵐山にマウンテンバイクコースを作ることです。もともとスキー場なので周辺設備も整っていますし、山の傾斜を利用して、あとは道を作るだけじゃないですか。絶対にいいと思うんだよなぁ。

まずは大人が日高山脈の良さに気付くことが大切

帰ってきて改めて思うのは、この場所で生きていけるのは幸せなことだなという

ことですね。都会に住んでいると、頑張って遠出しない限りは、山が見れないじゃないですか。山があって、川がある。こういう場所で仕事ができて、生活できる基盤がある幸せを日々噛みしめています。僕の奥さんは結婚した当初は山に対してそれほど思い入れがなかったみたいなんですけど、今はこの風景を気に入ってくれています。十勝の人も気付いていない日高山脈の良さって、まだまだたくさんあると思うので、今回の国立公園化を機に少しでも変わっていくといいな。たとえば、ニュージーランドでは近隣の山の散歩道や小さな歩道までがガイドマップに落とし込まれていたので、厳しい日高山脈の中でも登りやすい山に関してはそうした取り組みをすることで「登ってみようかな」と思える人が増えるんじゃないかな。

僕が幼い頃にそうだったように、子供は1人で行動できる範囲が限られていますから、積極的に自然に触れる機会がないと、子供たちはその良さに気付けませんよね。だから、まずは大人がこの土地の魅力に気付くことが大切だなと思っています。

自分のできることが少しずつ見えてきた

地元に帰ってきてからずっと「新しいことをやりたい」と言いつづけてきたのですが、僕自身が地域に貢献しようと思ったら、やっぱり農業かなと思ったんです。3年前からポップコーンの栽培を始めました。ポップコーンはちゃんと管理をしていれば2、3年経ってもカビないので、その貯蔵性の高さに可能性を感じたのがきっかけです。これまでは12月～3月までの冬期間限定で、家の近くにある友人の母親のお店を間借りして販売していたんですけど、今後は芽室の町の中での販売を視野に入れた準備を進めています。小学生くらいの子供が遊びに来やすくなるでしょうし、ポップコーンを売るだけでなく、自分が店に立ってポップコーンや砂糖の原料になっているビートなどの農作物について伝えられる場所でもありたいですね。そのためには地域の人とのつながりも大切になってくると思うので、町のいろいろな活動に顔を出したり、農業以外の領域の仲間を増やしたりできるよう、小さなことから始めています。

大学在学中に学外サークルに所属して、東京都の東久留米の農家さんや埼玉県・深谷市のネギ農家さんと農業体験イベントをやったり、学生に農業を広める活動をしてきたんですけど、やっぱり農業によほど興味がある人じゃないと、農業や農作物に関心を持つことはないんですよね。だからこそ、農作物を通じて、地元の魅力を伝えていくこと。Uターンをして芽室町のサイクルツーリズムの立ち上げやそこでのガイド経験、受け入れ、花火大会の実行委員など農業以外での活動にもいろいろ関わりながら7年が経った今、自分のできることがようやく見えてきた気がします。

帯広市

日高山脈は生き様を表す

提供：環境省

2023年5月から帯広自然保護官事務所のアクティブレンジャー（自然保護官補佐）に採用された谷水亨さん。JRに44年間勤める傍ら、年間50座ほどの山を登ってきた異色の登山家です。そんな谷水さんと日高山脈の出会いは、いまからおよそ10年前。2014年ごろから日高山脈を登り始め、ほかの山にはない独自の「顔」に魅せられてきました。北海道の山々を知り尽くした谷水さんに日高山脈の厳しさと魅力についてお話を聞きました。

環境省 北海道地方環境事務所 帯広自然保護官事務所

谷水　亨

Tanimizu Toru

1961年、北海道富良野市生まれの富良野育ち。帯広自然保護官事務所・アクティブレンジャー。サラリーマン生活の傍ら、春夏秋冬を問わず北海道の山々を年間50座ほど登って楽しんできた。日高山脈を楽しむほか、大雪山国立公園パークボランティアに所属し、公園内の自然保護活動にも範囲を広げ、2023年5月より現職。登山ガイド、海外添乗員、列車運転士などの資格を持っているほか、YouTubeでも北海道の山々の魅力を動画で配信中（Summit飛行隊・山親爺チャンネル）。

日高山脈っていうのは厳しい山ですよ。まず、登山道がある山が少ないですよね。十勝管内だと、剣山、芽室岳、ペケレベツ、十勝幌尻（とかちぽろしり）岳などに限られます。日高山脈の多くのルートは、沢登りをしたり、積雪期に登ったりするための訓練をしないといけない。沢登りをするときは地図やコンパスを使用して、迷わないように歩かなくちゃならないし、いろんな沢筋を知ったうえで数日前から天気予報を見て増水の検討をつけておかないと、流されて死んでしまうこともある。あとは、山脈の稜線を歩くかたちになりますから、頂稜部で水が取れないんです。だから、2泊3日だと7リットル～8リットルの水を持つと、25キロ以上のザックを背負って、ハイマツを漕ぎながら道なき道を2日も3日も歩きます。細い稜線を歩いているとクマに遭遇しても逃げられなかったり、ナイフリッジの岩場で滑落しそうになったこともあります。ただね、そんな恐怖や危険を経験しても、そこに立ち向かう自分自身が頼もしくて、山に通っているようなところもある。日高山脈は、限られた人しか登ることができないし、そんななかで単独登山や縦走に挑戦することで自分の人生観を変えることができました。

2023年5月からは長年憧れてきたアクティブレンジャーに採用されて、名実ともに「山の人」になりました。もともと僕はJR北海道に44年間勤めているサラリーマンだったんです。1986年ごろにJRの登山部に入って、年に1、2回ほど登山はしていましたが、子育てが落ち着くまでは趣味で山を登ることすら少なかった。本格的に山登りを始めたのは、40代後半に差し掛かった2008年ごろのことです。当時は月に1、2回のペースで、大雪山や十勝岳連峰を中心に日高と比べて比較的易しい山に登ってきました。

登山熱が高まったきっかけは、山と溪谷社のWEBマガジン「週刊ヤマケイ」への寄稿です。最初は単なる登山愛好家として趣味の範囲で寄稿していたのですが、専属ライターにならないかと声をかけてもらって。せっかくなら毎週寄稿したいと思い、2013年ごろからは休日になると登山に行くようになったことで、山に関する知識や技術も自ずと身に付いていきました。それから、専属ライターのなかで私だけ肩書がないことを恥ずかしく思って、2014年には北海道の夏山ガイドの資格も取得しました。趣味が高じてとはこのことですよね。余談ですが、気候・自然条件の厳しさや登山道が整備されていないことから、北海道だけはほかの地域の夏山ガイド資格とは別の、北海道限定の資格が設けられているんですよ。こんなことをフルタイムで勤務しながらやっていたわけで、当時から「信じられない」とよく言われていました。

日高山脈と出会ったのもこの頃ですね。「ボランティア活動を通じて、山に恩返ししたい」という想いが高まり、帯広勤労者山岳会に入会しました。いざ入会してみると、山岳会ではボランティア活動を行っていなかったのですが、「いつか登ってみたい」と思っていた日高山脈の山々を登る目標が叶いました。入会当初から日本二百名山最難関の山と言われる「カムイエクウチカウシ山」に登りましたが、経験豊富な先輩たちと一緒に日高山脈を登るなかで、沢登りをはじめとした冬山登山や登山道のないルートを歩く高度な技術を身に付けていったんです。

提供：谷水 亨

定年後、憧れのアクティブレンジャーに

アクティブレンジャーという仕事を知ったのは、２０１８年に大雪パークボランティアに入会したときです。大雪パークボランティアでは、東川、上川、上士幌事務所のレンジャー、アクティブレンジャーとボランティアの方々が一緒に活動するのですが制服がかっこよくてね、似たようなシャツを購入して活動していました。60歳でＪＲを定年したら新しいことに挑戦したいと思っていたので、アクティブレンジャーの求人も調べていたんです。でも当時は60歳までの年齢制限があって、応募できなかった。結局は定年後も62歳までＪＲで働くことになるんですが、２０２３年２月、再雇用契約を更新した直後に、帯広自然保護官事務所のアクティブレンジャーの求人を見つけたんです。年齢制限は撤廃されていて、採用条件の一つが「20キロのザックを背負って日高山脈を歩けること」というものでした。先ほどお伝えしたように、日高山脈には登山道がないルートが多いですから、沢登りや、やぶ漕ぎの経験がないといけない。一般的には厳しい条件ですが、私のための仕事だと思いました。ただ、求人情報を知ったのは外出先で、3日後の締め切りまでに札幌の事務所に履歴書と小論文を必着で送らなければいけないことがわかって。すぐに妻に電話して履歴書を買って用意してもらい、一晩かけて小論文を書いて、翌朝速達で出したんです。ドラマチックでしょ？ この運とチャンスを逃したくない一心がそうさせたのかもしれません。書類選考と面接を受けて、合格通知を受け取ったときは感慨深かったですね。ボランティアを長く続けるなかで、憧れてきたアクティブレンジャーになれたわけですから。

アクティブレンジャーとしての私の主な仕事は、自然保護官＝レンジャーの補佐として日高山脈の国立公園化に向けた現地調査や普及啓発活動をすることです。現地調査では、登山者の利用状況や整備状況の調査に同行しています。２０２３年は日高山脈の中部にあるペテガリ岳や、幌尻岳、剣山なんかにも登りました。仕事で登るとなると、いろいろと勉強しなくちゃいけませんから知識がさらに身に付く。もうね、すべてがやりがいです。操作が難しいパソコン作業以外はなにをやっても楽しいですね。

個人的な活動目標としては、日高山脈の魅力を地元の方々に知っていただきたい。私もそうであったように、多くの人は日高山脈についてあまり知らないと思うので。自然環境は私たちの年代だけでは守れるものではないので、価値あるものだということを子供たちにも伝えていきたいと強く思います。ここまで日高山脈の厳しさばかり伝えてきてしまいましたが、アポイ岳は登山をあまりしたことがないファミリーの方にもおすすめですよ。橄欖（かんらん）岩といった珍しい地質と気候の厳しさゆえに、アポイ岳にしかない高山植物や蝶が見られます。まずはアポイ岳の良いところを知って、日高山脈に興味を持ってもらえるといいなと思います。

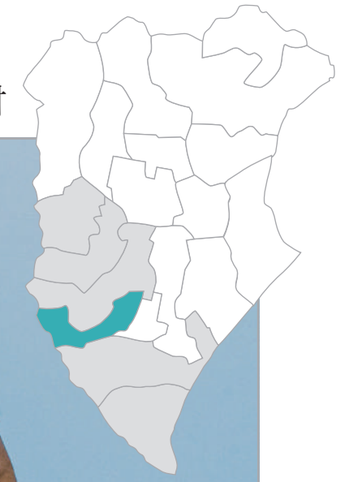
提供：谷水 亨

道なき道はどんなふうにでも歩ける

私にとっての日高山脈ですか？ 妻のような存在、と言いたいところですが、第二の人生を豊かにしてくれた師匠のような存在かな。なんとなく生きてきた人生に区切りをつけて、新たな目標に挑戦させてくれた。やっぱり、1人でヒグマ生息地で20キロ以上のザックを背負って、道なきやぶの中を歩けば人生観は変わりますよ。目指した山を登るための準備と体力を身に付ければ、あとは気負いせず、ゆっくり、道なき道でもどんなふうにも歩けるっていうことですよね。人生を山に例える人がいますが、「遙かな山頂ばかり見て登ると、歩くことがいやになる。また、足元ばかり見て歩いていると道迷いをしてしまう。そしてしっかりと準備をしなければやり直しがきかなくなることもあるのが登山だ」。人を寄せつけない日高山脈と向き合うことを通じて、自分の生き様のようなものが形作られてきた気がします。

提供：環境省

提供：谷水 亨



生まれ育った場所が好きだから

「ふるさとの山を国立公園へ」。そんなキャッチコピーを掲げる中札内村の日高山脈国立公園化PR事業実行委員会(以下実行委員会)。そこには地元の人がまず一番のファンになり、ふるさとを誇りに思えるようにという願いが込められています。実行委員長である須賀裕一さんは「わが街から眺める山が一番好き」と話す、十勝人の代表のような日高山脈好き。ただ「眺める」だけの山から、誰もが「語れる山」へ。実行委員会の目的や活動を通して伝えたいことをお聞きしました。

日高山脈国立公園化PR事業実行委員長
須賀 裕一
Suga Yuichi

1960年、中札内村生まれ。高等学校卒業後、消防士として中札内消防署に勤務。2021年3月退職。同年6月から日高山脈国立公園化PR事業実行委員会に入り、2022年4月から実行委員長を務める。

旅行でいろんなところに出掛けて行っても、帰ってきて日高山脈を見ると、ああ、ふるさとに帰ってきたな、やっぱり良い場所だなという気持ちになるんです。僕自身は明治時代に曽祖父が入植して農業を営んできたので、ずっと中札内村で暮らしてきました。小さい頃からずっと見ている景色ですが、いつ見ても、何度見ても飽きないですね。僕の大好きなのは、まさしく十勝幌尻(とかちぽろしり)岳。僕には、中札内村から見える十勝幌尻岳が真っ直ぐ正面と思えて最高です。寒いけれどやっぱり厳寒の時期の景色が好きですね。湿度が低い季節になると、山がすごく近くに見えるんです。6月くらいの湿度が高いときは、山が遠くて平坦に見える。それが冬は湿度がない分すごく近く、シルエットがくっきり見えます。犬の散歩のときには必ず山を見るんですが、一番好きなのは朝日に照らされて真っ赤になる十勝幌尻岳で勝手に「赤ポロ」って呼んでいます。十勝に住んでいれば、少なからず家や車の窓から日高山脈が見えて、場所によってさまざまな表情があると思います。そのなかでも、やっぱりみんな自分が毎日見る山の角度が1番好きだと思うんです。つまり、自分が生まれ育った場所が好きということですよね。僕はその気持ちをずっと大切に持ちつづけてきました。

今でこそ中札内村は移住者に優しい村を掲げていますが、昔の話をすると、よそ者は嫌われたんですよ。どうせ1、2年したら飽きてどこかへ行ってしまう、仕事で転勤してしまう、定着しないでしょうっていう感じで。でも、徐々に移住者が増えてくるなかでよその人と話をする機会が増えて、もともといる住民の意識もどんどん変わってきたと思うんです。よそから来た人に逆に地域の良さを教えてもらうことが多々ありまして。移住先を中札内村に決めた理由の一つには「日高山脈が見える場所に住みたい」という希望もあります。この山の美しさに惹かれて移住する人は多いですよね。

じゃあ、長年住んでいる人はなぜそれがわからなかったんだろうって。まあ「当たり前」だったんですよ。いつも見ている景色、当たり前にある山、当たり前にあることがどれだけすごいことかをわかっていないんです。だから、この実行委員会の目的としても、まずは地元の人に知ってもらうことから始めました。

地元の人が一番のファンになるようなきっかけづくりを

2021年に中札内村からの呼びかけで実行委員会が発足しました。中札内村には札内川園地やピョウタンの滝などの観光地があり、日高山脈への登山口や山岳センターもあるので、村として独自に委員会を作り村民に参加してもらって日高山脈をPRしていこうという趣旨でした。当初集まったのは9名。農家、主婦、自営業者、退職者など25歳〜70歳くらいまでと年代の幅も広く、3年目を迎えた現在は15名に増えています(2023年12月現在)。

実はメンバーのなかで、ずっと中札内村で暮らしている人は少数派です。移住してきた人は中札内村を選んで暮らしている、という意識をより強く持っているのではないでしょうか。日高山脈が好きだから、山のことを学びつつほかの人にもPRできる、一石二鳥な機会と捉えて参加してくれているのかなと思っています。

「ふるさとの山を国立公園へ」という僕

らが考えた実行委員会のキャッチフレーズは最高だと思っています。自分たちがいつも見ている山が日本で一番大きい国立公園になる。その自覚と誇りをそこに住んでいる人が持つか持たないかが重要ですよね。日高山脈のファンが十勝のファンになり、中札内村のファンになってもらえる。国立公園になることによって全国に発信され、行ってみたい、見てみたいっていうチャンスが生まれる。ファンになってもらうためには、地元に住んでいる私たちが日高山脈や十勝や中札内村を知ることが必要で、そもそも知る前に「好き」になろう、住んでいる私たちが一番のファンになろう！って皆さんに伝えています。僕があまりに熱く話すので、「熱さが伝わった」って言ってくれる人もいて。日高山脈が好きな村民の代表が僕だという意識で実行委員長をやっています。

実行委員会の活動としては、まずは村民が山のことを知って、ほかの人に聞かれたときに話せるようにと、いろんな方向から話をしてくれる人を招いて講演会を開催してきました。

たとえば、日高山脈があることで十勝晴れが見られるとか、プレート同士がぶつかったことによって切り立った形になったとか、山の成り立ちや地質、気象のことなど、専門知識を持った方に話してもらっています。知識だけではなくて、登山家の方には山自体の印象や素晴らしさなども伝えてもらっています。

村内の小・中学生には村民全戸に配る日高山脈カレンダーの写真を選んでもらいました。子供が選ぶ写真は、山がくっきり映っていて青空で、スカッと気持ちが良いものが多いですね。朝霧がかかっていて……みたいな情緒的な写真はまず選ばれませんでした。カレンダーですから年中家に飾ってあったら目にする機会が増えるかなと思って作りました。

高齢者には「ポロシリ大学」という生涯教育の一環の活動のなかで話をさせてもらいました。農業を営んできた人も多いので、農業に向いている天候を作り出しているのが山の存在だということとか、生活に関わることだったら関心を持ってもらいやすいです。いつもそこにある当たり前の山が、美しい、素晴らしいというのを伝えることって難しい。でも、それこそが今回の実行委員会発足のきっかけですから。

話のなかではいろいろな地域から見た日高山脈の写真を見比べたりして。山脈ですから見る場所、角度によってまったく違う。そうしたらやっぱりね、自分の住んでいるところから見るのが一番だなって、皆さん思うんですよね。

「好き」に「知識」が加われば もっとおもしろい

「好き」という気持ちが生まれたら、もっと知りたくなると思うんです。それが学びですよね。中札内村はどこからでも日高山脈が見えますし、小・中学校の校歌にも「ポロシリ岳」という言葉が入っています。だから、みんな言葉としては知っています。でも、そこが怖いところでもあって。「いつも見る山、当たり前の風景、なんてことはない。それが国立公園になるってなに？」と思う人が多数なんですよ。国立公園になるということは、南北に150キロもある、日本一の広さの国立公園だということが、日本や世界にコマーシャルされます。そんなところに住んでいて、なにも知らないっていうのはもったいないじゃないですか。さまざまな角度から理解を深めていって、素晴らしさを知って自分たちが誇りに思えるようになって初めて、外から来てくれた人にも伝えられるだろうと思っています。

僕自身も、これまではただ見て「きれいだな」と思ってはいたんですが、そこに「あの左側のほうにスプーンで削ったような形はカールと呼ばれていて、カールが麓からも見えるのは日高山脈だけ」ということを講演会を通して知って。それが実際に目で見てわかるようになっただけでも意識が変わったというか、おもしろいなと思えるようになりました。僕が感じた気持ちを1人でも多くの村民に味わってほしいなと思っています。

中身のあるものを知って初めてPRできると思っているので、それがないと説得力が欠けてしまう。まずは村民がファンになって一人ひとりが語れるようになる。実行委員会の活動を通して少しずつ浸透しているとは思いますが、もっとその想いを膨らませていきたいですね。

日高山脈国立公園化PR事業実行委員会の皆さん

大好きな日高山脈のためになにかしたい、と思って入った実行委員会ですから、活動を続けてきて、自分の気持ちのなかではすごく充実しています。ただ、それがどれだけの人に伝わっているかというのはわかりません。やはり小学生ぐらいからもっと親しんでもらったり、理解してもらったりする機会が多いと良いと思います。子供が知れば、大人にこんなことやったよ、聞いたんだよと話して広がっていくと思うので。もっと充実したものになっていくのかな。

講演を聞きに来てくれる人はどんどん増えていますし、村民だけではなく、十勝管内からや、観光の途中でたまたま日程が合ったので参加してくれた人もいました。現在は不定期で村の広報に実行委員会作成のかわら版を折り込んでいます。実行委員会の活動や山の豆知識を載せていて、知らなかったことを知るきっかけになるようにと思って作っています。講演は聞きに行けなかったけれど、こういう内容のことを話してたのか、じゃあ次は行ってみようかと思っていただければいいなと。徐々に徐々に、みんなの心にちょっとずつ、日高山脈について目や耳に触れる機会を増やしているという感じですね。

僕自身は実行委員会に入ってから登山を始めました。膝が悪かったから、あんまり山は行かなかったんですけど、意外にこれぐらいの山だったらまだいけるなという感じで登っています。装備や心構えなどなにが重要かっていうことも、まずは自分が経験してみて感じたことを大事にしています。

また、山登りをしている人の力を借りたいと、北大山岳部とも連携するようになりました。彼らには360度カメラを持って登ってもらって、その映像は観光協会で流してもらっています。学生たちに一緒に関わってもらうことによって、村としてもwin—winの関係でいられるので、今後もそうやっていろいろなつながりを大切にしていけば、山の専門的な話もできるし、実際に山を登っている人がなにが欲しいか、必要なのかがわかると思うので、そうした情報共有をしていきたいですね。

基本的には国立公園になるまでの実行委員会ですので、なった後は違う形で、実際の担い手として活動していければ良いのかなと思っています。また、十勝のほかの地域や日高側とも相互交流ができればと思っています。連絡を取り合ったり、情報交換ができたりといった関係性が生まれればもっと可能性が広がると思います。登る人、見る人、そのほか日高山脈全体を含めた観光ルートを作るなどの取り組みを増やしていければ最高ですね。

国立公園になったときには、村民一人ひとりと喜び合って、地元の食材を集めた祝賀会をやりたいねと話していて。それが開催できる日を楽しみに、日高山脈のファン作り活動を続けていきたいと思います。

広尾町

遊び場として、ここより最高なところはない

十勝の最南端に位置する広尾町の中でも日高山脈の麓に近い、音調津（おしらべつ）で生まれ育った白幡定（さだむ）さんは、漁師を生業としながら、山を駆け巡る猟師でもあります。年上の友人たちが狩猟をする姿を見て、「こういう遊びもいいな」と山に入りはじめ、日高山脈の魅力に惹きつけられてきました。山も川も海も縦横無尽に駆け巡る白幡さんの、日高山脈との暮らしとはどんなものなのでしょうか。

白幡　定

Shirahata Sadamu

1950年、広尾町音調津生まれ。地元の広尾高校を卒業後、家業の漁師を継ぐ。年上の友人の影響を受けて20歳で狩猟免許を取得し、近場の山々をフィールドに狩猟、山菜とり、魚釣りを楽しみながら暮らす。広尾漁協ししゃも桁曳網漁業部会会長を経て、現在は趣味として山へ入って遊ぶ毎日を過ごしている。

生まれも育ちもずっとここでね。漁師の仕事は本当は継ぎたくなかったんだけれど、5人兄弟で俺が長男だからどうしても家に残らなきゃいけなかった。高校出てからだからもう55年になるね。昔、船が小さかった頃はすぐ近くの音調津漁港を利用していた。大きな船に変わってから広尾の港に移ったのさ。今はシシャモと毛ガニ、コンブ漁を生業にしているけど、13年くらい前までは1年中船を出していた。2ヶ月以上家に帰らなかったときもある。釧路や根室のほうまで行って、サケ・マス流し網漁やサンマ流し網漁もしていたから。今は妻と2人暮らしだからそこまで商売しなくてもって、どんどん仕事を削ってるのさ。

若い頃、俺より10歳以上年上の友達で狩猟をやっていた人が2人いてね。クマやシカを捕っている姿を見て、こういう遊びもいいなと思ってさ。20歳になって狩猟免許を取って、山を覚えるために年上の人たちに山歩きに連れていってもらって、至るところを歩いた。どの山にどういう獲物がいるかまで把握しながら山を覚えていったの。ここは日高のえりも町目黒という地域がすぐ隣なんだけど、ここから山越えして向こうに夕方下りる。帰りは車で迎えに来てもらうんだわ（笑）。そういうこともやっていた。山菜とりも若いときからずっと好きでね。春先のタラの芽から始まって、コゴミ、フキ、フキノトウ、葉ワサビ、ワラビだとか。秋になると天然のシイタケなんかもとれる。ここは山菜も豊富なんだよ。山に入ると川の近くも通るから釣り竿も持っていって、魚釣りもするし。今までずっとそういうふうにして遊んできた。とってきた山菜は自分たちでもちろん食べるけれども、昔は山菜とりに山に入っていて今は入れなくなっている年上の人たちにも分けている。これだけクマが多くなると怖くて当然入れなくなるしょ。だからその人たちのためにもとっているんだよね。

クマとはしょっちゅう会ってる 去年はクマと大格闘した

山の中を歩くのが好きでね。木々を見たり、川遊びをしたり、動物に出会ったりして。クマとはしょっちゅう会ってるよ。ここ5、6年は危険な目に遭ってもいる。去年は大格闘してね。爪はかけられなかったから傷一つないけど、2本の助骨にヒビが入った。銃に弾を入れるのが間に合わなくて、いきなりかかってこられたから。構えて、銃でクマの頭をバーンと叩いたの。したら向こうは頭ばっかり集中的に叩かれるから、もうバックしていく。バックしては向かってくるのさ。だから半歩前に出て構える。したらそこでクマが止まる。して、頭を思いっきり銃で叩く。でも3、4回叩いたら銃床がポッキリ折れたの。したら銃に弾を入れることができないから、しゃあないからそれで叩きつづけて。力任せに叩くから余計な力が入ってヒビが入っちゃった。ほかにも軽トラにかかってこ

られたりね。

このごろはクマとの距離がかなり近くなっているよね。若いときにはそんなことはあまりなかった。昔と比べたらクマの数が多いんだよ。春グマの駆除をしていた時代があったけど、今は出動命令がかからないと捕りに行けない。クマを捕らないから当然増えてきている。だから適当なところで止めなきゃだめなんだ。1度里に出てきて食べ物を漁ったクマというのは、駆除しないとしょっちゅう出てくるんだよ。

シカも、昔は山の中の特定の場所にしかいなかった。その頃より前からシカの保護は始まっていたから、牝ジカは捕っちゃだめだった。だから結局どんどん増えていく。3年捕らなかったらどうなると思う?倍になっていくんだから。今増えた結果、駆除してくれっていうことで盛んに駆除しているわけでしょ。俺は毎年400頭以上捕っている。保護しなくちゃいけないのはわかるんだけど、保護しすぎた結果がこうなっていて街の中にまでシカがうろうろしている。昔はキツネでさえこんなに近くには来なかった。だから増やせばいいというものでもなくて、駆除する必要がある。

ほかの人が絶対経験できないようなことが、ここならできる

ずっと山を登っているからわかるんだけど、四季折々の山が本当にきれい。何度見てもね。雪が降ったら余計きれいになる。魚は、ヤマベもイワナもたくさんいるし。以前はそこまで人に知られてはいなかったけれど、最近は道内各地からヤマベやイワナを目掛けて釣りに来る人が増えた。毎年ヤマベの解禁週には、一緒に狩猟免許を取った同級生の相棒と2人で行くよ。イワナはほとんど釣らないで全部逃してくるけどね。今は1人や2人で山に入るけど、昔は10人くらいのグループで入ってたからワイワイしながら楽しかった。獲物を捕ったら、帰ってきて解体してみんなで焼肉パーティーだもん。しょっちゅうやっていたね。解体も始めた頃はなにもわからないから捌き方から全部教えてもらって、見てやりながら覚えていった。シカを1頭解体するくらいならすごく速くできるよ。ほかの人が解体するのを見てたらまどろっこしくってね。速くやれよって(笑)。ナイフの刃の先端しか使ってない人が多いんだけど、刃全体を使えばガバッといく。速く解体しないと肉全体に血がまわって美味しくなくなる。だからまずは腹を捌いて内臓を出して、川の中に半日以上つけておく。昔はその場で解体していて雑だったんだけど、自分でやっていくうちにやり方を変えていって。俺はシカ肉自体は今はほとんど食べないから人にあげるんだけど、肉の臭みがなくて美味しいと喜んでくれる人がいっぱいいるよ。この辺りは海のそばだから、塩分を含んだ良い餌をシカが食べていることもあるかな。

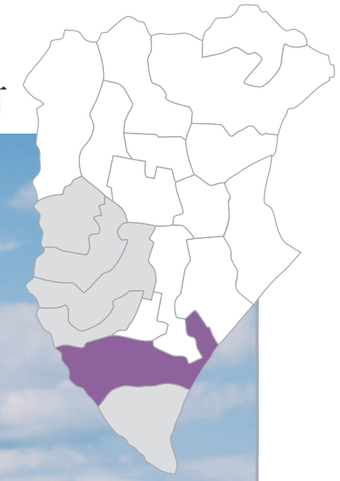
漁師の仕事は日曜が休みで、海がしけたらその日も休みになる。だからその時間を使っては山に行って、山菜をとったり、川釣りをしたり。音調津の山奥の隠れ滝が俺は一番好きだね。渇水期でも水がだーっと落ちている。すごく大きなヤマベも釣れる。その手前に砂防ダムがあるから、まさかその上流にヤマベがいるっていうことはまだ知らない人のほうが多い。水の流れが豊かなわけではないしね。両端が木で囲まれているから航空写真でも写らない。毎年行く度に本当にいいところだなあと思う。林道の終点から歩いて30分くらいのところだね。いつもカメラを持って歩くから写真は結構撮るし、携帯でも撮ってくるんだわ。だから、携帯も画質の良いやつ使っていてね。

ここは山が目の前だからね。何時間も車を走らせてたどり着く場所じゃなくて、ほんの5、6分車で行ったら猟場で、川もすぐ近くにある。海に行ったらサケも釣れるしね。なんでも釣れるんだから。条件のいいところにいるし、遊ぶ場所としてここは最高。春夏秋冬いろんな楽しみ方ができる。日高山脈の魅力は、ここにいれば十分にわかりすぎるくらいわかるから。ほかの人が絶対経験できないようなことを随分経験しながら、楽しんでますよ。これからもずっと楽しんでいきたいね。

白幡さんが撮影した、『音調津の山奥の隠れ滝』の写真

車に残っている、クマに引っ掻かれた傷

大樹町



砂金から辿（たど）り着いた、日高山脈のおもしろさ

7年ほど前に「十勝のジオツアー」に参加したことで、日高山脈の成り立ちと歴舟（れきふね）川で砂金が採れることの関係性に気が付いた有岡繁さんは、20代から「大樹砂金掘り友の会」の会員として活動してきました。離農後、山林の仕事を20年続けたことで森や川の生態系の変化も感じてきたと言います。町などが主催する自然体験学習などで多くの子供たちや、道内外の体験希望者たちと触れ合う有岡さん。自然のおもしろさについて伝え、本来の姿を守る重要性を感じると話します。

大樹砂金掘り友の会　代表

有岡　繁

Arioka Shigeru

1950年、大樹町生まれ。酪農業に従事後、大樹町森林組合などで勤務し20年ほど山の仕事に関わる。創設時より「大樹砂金掘り友の会」に携わり、現在4代目代表。北海道が認定する木育を普及させる専門家である、北海道木育マイスターとしても活動。子供向けに開催する自然体験学習などでも講師を務めている。大樹町観光協会理事、北海道砂金史塾理事でもある。

なぜ、歴舟川で砂金が採れるのか。砂金が身近な存在だったからこそ砂金を掘れることがずっと不思議だったんです。1950年代ごろまでは、砂金を買い取っていた近所の商店がありました。僕が小中学生の頃は、まだ3、4軒砂金掘りだけで暮らしている人がいました。夏は川で砂金掘り、冬は甥っ子のところへ行って生活しているおじいちゃんもいた。当時は、砂金掘りに来る人たちも多かったんですよ。うちの隣に住んでいたじいさんがゆり板（注：砂利を乗せて川面で揺らす板。砂金掘りには砂利を掬うカッチャという道具も必要）を200枚くらい作って、来る人たちに教えていた。そうして自分たちもやってみようかと言い出して始めたのが「大樹砂金掘り友の会」のはじまりなんです。発足当初は40人近くいたんだけど、だんだん過疎化と高齢化でいなくなっていって現在は7人で活動しています。

斜めになっている不思議な地層に、子供たちも興味津々

7年くらい前に帯広百年記念館と十勝の自然史研究会が共催していた「十勝のジオツアー」に参加して、年5回ほど数年に渡って十勝管内の全市町村をひととおり歩いて。そこで日高山脈の成り立ちがほかの山脈と違うことに興味を持った。大樹町内に流れている歴舟川は、上流が3つの川に分かれているのですが、河原の石が微妙に違うんです。ここに日高山脈のでき方が関係しているんですよね。プレートがめくれ上がってできた山脈だから、南に行くにしたがって地下深いところでゆっくり冷え固まった石が出てくる。北側のほうは浅いところでできる堆積岩なんですよ。それが顕著に現れているのが歴舟川の3つの川。一番北側の本流は灰色っぽい砂岩、中の川は縞々模様の片麻岩（へんまがん）などの変成岩、南側のヌビナイ川は深成岩の真っ白な花崗岩。3本の合流地近くのカムイコタンの地層もおもしろい。あそこだけで400万年くらいの地層がギュッと詰まっている。東側から押されて日高山脈ができているから、海の底に溜まった火山灰の層や砂の層、砂利の層が斜めになっているんです。小学校などから依頼を受けて子供たちを連れて行くと、「斜めになっているのが不思議」と興味津々な様子で言いますね。教科書で習うのは平らな地層だからね。

そもそも金という物質は、地球が誕生するときに宇宙から隕石として降ってきた塊の中に入っていたと言われています。金は非常に重たい物質なので下に沈む。地殻変動で熱が加わって、ある温度になると冷えて金を含んだ物質が固まるん

1960年代にかけて下流の氾濫を抑えるために上流に砂防ダムができてしまい、砂金の採掘量が減ってしまった。もう1つ興味深いのは、中の川の支流でも砂金が結構採れた場所があったのですが、林道を作って流れ込んでいる沢を抑えてしまった。すると、抑えられた途端に砂金が採れなくなったらしいんです。つまり、川の流れを堰き止めた結果、石などが流れなくなり砂金がまったく採れなくなってしまった。

おそらく、この大樹町尾田付近の地層を岩盤まで掘れば砂金が出てくると思うんですよ。というのは、歴舟川は大昔は十勝川のほうに向かって流れていたんです。日高山脈ができるときにプレートがかなりの力で押され、ぶつかって凹んだところが今の十勝平野で、凹んだところが内海になっていた。年代とともに隆起が起こり、歴舟川は北向きから今の流れに変わりながら、今の上更別や忠類、大樹の大地が生まれました。だから、日高山脈からの水の流れは今と変わらないので、砂金があらゆるところにばら撒かれている。そのいい例として、幕別町の糠内川でも微量の砂金が採れるんですよ。糠内川の源流は畑の中の段丘です。また、更別の市街地で井戸を掘ったら貝殻の化石が出てきたこともありました。十勝川をいかだで下っていくと、泥炭層や貝殻の化石を含んだ層も見られます。海だった証拠ですね。

50歳で怪我をして離農を決め、2年くらい仕事を休んでいた時期に、帯広市で川遊びの指導者養成講座をやっているのを知りました。おもしろそうだなと興味を持って参加したのが、川や山林を深く知っていくきっかけで。同時に大樹町森林組合での仕事も始めて、木の植え付けから下草刈り、間伐など、約20年間町内の山に入って森を見てきました。ある日の仕事場のすぐ近くが、高校生の頃にアルバイトで国有林の草刈りをしていた場所だった。でも当時植えたトドマツが全然育っていない。確かにあの場所に木を植えて草を刈った記憶があるんだけどね。そこはもともと広葉樹があった場所なんです。生育条件が合わなかったんでしょうね。でも、トドマツは70年で収穫ができるので経済効率はいいと思うんですね。だからトドマツを植えるのですが、それがです。そのときに石英(注:鉱物で、特に無色透明なものを水晶と呼ぶ)も一緒に固まる。石英と金が固まる温度が一緒なの。なので、石英がある場所には金がある。石英と金が含まれている厚い層が金鉱脈になるのですが、日高山脈のどこにも石英の厚い層がないんです。ただ、薄い層はある。その中に含まれていた金が、日高山脈が削られるときに一緒に流れ、川底に沈んだ。それが砂金です。だから粒が砂のように細かい。

しかしながら、1950年代から動物の住処をなくすことにつながっている。隠れ家にはいいんですよ。でも食べ物がない。近年、鹿や熊が街に出てきているのは、山の中に食べて暮らせる場所がなくなっているからではないかと思っています。

至るところで植樹祭をやっていますよね。でも育樹祭をやっているところはない。植樹祭で木を植えた人は植えて終わり。その後の管理は森林組合などにお願いしているのが現状です。管理ができなくて、植樹祭をしたという記念碑だけが残ってしまった場所もあるんですよ。植えた木というのは最後まで面倒を見なければ大きな木にはならないんです。植樹祭をやるなら、育樹祭もやるべきです。そういう考えを持てば、もう少し良くなるんじゃないかと思うんです。

日高山脈の珍しい成り立ちをもっと多くの人に知ってほしい

農家をやっていたときはほとんど移動していなかったので、日高山脈の中でも目の前にある山しかわかっていなかった。ところが離農していろんな場所で仕事をしていくことで、その場その場で見える日高山脈の形が違うことに気付きました。やっぱり十勝から眺める日高山脈が一番きれいなんだよね。日高や富良野方面からだとなだらかで山脈として認識しづらい。十勝側から押されてできた山脈だからこちらのほうが傾斜が激しい。日本にある山脈の中では珍しい成り立ちを持っているから、もっとその辺りを多くの人に知ってほしいですね。大樹町の萌和(もいわ)山から眺める日高山脈が好きです。あとは、近所の豊里の段丘の上。山脈の連なりがよく見えて、特にてっぺんのほうが白くなった季節が一番良い。

日高山脈もそうだけど、歴舟川を昔の川に戻したい。子供の頃は魚がいっぱいいたんですよ。カジカやドジョウ、ニホンザリガニもいました。1975年くらいからかな、全然姿を見なくなってしまった。ハナカジカはここ何年も見ていないですね。ニホンザリガニは、湧水がきれいで広葉樹のあるところでないと住めない。針葉樹に変えてしまうと、いくら水がきれいでも住めないんです。植林をしていてもそうなんです。木を切ったときにエゾサンショウウオの卵がいっぱいあっても、そこにカラマツを植えて水を枯らしてしまうと全部いなくなる。何ケ所そういう生育地を壊しているか。今年に入って1ケ所だけエゾサンショウウオの卵を見つけました。そこはそのままになっているのでおそらく大丈夫。本当は砂防ダムを壊すのが一番手っ取り早いのですが、まず不可能です。最近、砂防ダムからスリット式という櫛状に空洞のあるダムに変わっている場所も多いんですよ。そうすると、生き物が行ったり来たりできる。本来の生態系を守るためにも、子供たちに自然の楽しさをもっと伝えていきたいし、触れてほしいですね。

清水町

季節を感じる、ヤギたちとの暮らし

日高山脈の麓、十勝千年の森を含む約500ヘクタールの広大な土地。ここで農業と畜産を営んでいるのがキサラファームです。代表を務める斉藤真さんに、ヤギたちとの暮らしについて話をお聞きしました。

キサラファーム社長

斉藤　真

Saito Makoto

1976年、群馬県生まれ。帯広畜産大学を卒業後、2001年にキサラファームの前身であるランラン・ファームに入社。ヤギの飼育からチーズ製造までを担当。2019年にキサラファーム代表取締役に就任。同年「第12回 ALL JAPAN ナチュラルチーズコンテスト」で「十勝シェーブル炭」がシェーブル部門金賞受賞。

キサラファームはヤギの飼育と搾乳、チーズ作りと、畑で野菜を栽培する2つの業務を担っています。僕は代表をやっていますが、普段の主な仕事はヤギに関わることです。ここで育てているヤギは日本ザーネン種という品種で現在は90頭くらいいて、搾乳しているのが35頭程度です。

牧場の方針として掲げているのは、人もヤギもお互いにストレスがないところを歩み寄るということ。ヤギにとっては柵がないほうがいいけれども、柵がないということは、僕たちにとっては、道路に出てしまったり、ほかの畑に行ってしまうとか心配ごとが増えてストレスになってしまう。じゃあこの畜舎の中だけで飼ったら一番楽だけれども、ヤギにとってはストレスが溜まるでしょうという話で。そのお互いの妥協点を探すというところですかね。もちろんヤギが会話するわけではないので、結局は人間の都合なんですが、どちらの都合も考えながら飼育するようにしています。放牧は自由にしていますが、わりとうちのヤギたちは引きこもりで。畜舎が好きですぐ帰ってきちゃうんですよね。よそに聞いても、こんなすぐ帰ってこないよって言うんですよね。日没ぐらいまでは帰ってこないって。

放牧が良いのは、やはりミルクの味、ひいてはチーズの味への影響ですね。ヤギのミルクって、場所の匂いを吸うってよく言われているんですよ。その場所の匂いがつく。前任者が実験をしたことがあって、チーズをチーズ工房やレストラン、事務所などいろんな場所に置いて食べ比べてみました。すると、どの場所に置いたチーズかわかるくらい、その場所の匂いがするんです。実はそのときに一番美味しくなかったのが、チーズ工房だったそうなんです。それで、工房の下水や飼育環境を見直して、すべてきれいにしました。ヤギは基本的に寝て起きた後に排泄をするので、なるべく寝て起きたら外に行くよう促したり、下痢などの病気をしないように対処するなどの工夫をしています。それが最終的なチーズの味に響いてくるんです。チーズを食べる人にとっては、その第一印象で美味しくなかったら、もうこのチーズは買わない、となってしまうので。

僕がキサラファームの前身であるランラン・ファームに勤めたのはもう20年以上前のことですが、そのころヤギは今よりも多く150頭くらいいましたが、チーズは1日数個しか作っていませんでした。今の畜舎ができたときだったので、ドアを開ければヤギがわっといっぱいいて、環境もまだまだ整っていないような状況でしたね。僕自身はヤギを飼育するのは初めてだし、先輩2人と試行錯誤しながらやってきましたね。

ヤギの飼育という面では、ここは決して向いている土地とは言えません。清水の中でもこの羽帯（はおび）という地域は山が入り組んでいるところなので、寒いし、雨が多い。ヤギは雨が嫌いな動物なんです。放牧していても、通り雨が降ると帰ってきちゃいます。なにか雨の匂いを空気で感じるからなのか、降りそうな天気だとあまり外に出たがりません。じゃあなぜここでやっているのかというと、ここは畑作をやるには土地が痩せているから向いてないし、じゃあ、牧草を作ろうかっていうと、やはり雨が多いと収穫のときに濡れてしまうリスクが高くて難しい。そう考えていった結果が放牧でした。放牧できる動物というと、牛、ヤギ、羊。牛はどこでもやっているし、羊は日本では肉生産が多く、チーズ作りは少数派。それならば、ヤギを育てて乳を搾ってチーズを作る。それがこの場所でできることだと思っています。単純に山を背景にヤギたちが放牧されている風景も絵になりますよね。この場所の立地を生かそうと思ったら、今ヤギを飼っているなかで、最大限にできることを突き詰めていくことが、この場所での暮らしをより充実したものにしていけるのかなと思っています。

動物と触れ合う仕事がしたくて

僕は群馬県桐生市で生まれ育ちました。家から出て2歩くらいしたら山、という環境だったので、普通に暮らしのなかに山があった感じです。遊ぶのも犬の散歩をするのも山。さらに自然大好き家族だったので、特に父親に山菜とりにもよく連れていかれました。だけど、正直僕はあまり得意ではなくて。小さい頃の写真は、だいたい山の上で父親と姉は楽しそうにポーズを取っているんですが、僕1人浮かない顔をしていて……。

そんな僕でしたが、動物は好きでした。桐生市って動物園が市営だったんです。で、無料で入れたんですね。そこが家の近所だったのでよく遊びに行っていました。動物も好きだったし、こういう環境で働きたいなと思って、中学生くらいのときに、動物園の人に「ここで働きたいんです」って伝えたことがありました。そうしたら「酪農系か、農業系の大学を出てからもう1回来て」って言われて。それを鵜呑みにして大学進学の際にもいろいろ考えていました。

結局は家から近かった群馬大学の生物科学工学科に進みました。その時期にバイオが流行っていて、なんとなく、植物とか生物、自然の方向で考えていたのですが、やっぱり自分が学びたいのはこれじゃないなと思って、2年生のときに帯広畜産大学に編入しました。

畜産大学に入って衝撃を受けました。今まで関数電卓とパソコンでしか授業してない、数学と科学と物理の世界から、畑行って耕してみたいな授業にいきなり変わって。これ、大学か!?と思いましたね。1ヶ月経ってもノートを使わなかったですから。

就職活動中には、もちろん地元の動物園に「卒業できるんで動物園で雇ってください」って言いに行ったんですよ。そしたら「今欠員ないから」って。約束と違うじゃんって思いました。でも、子供の頃に見ていたものと、大学を出て見たものはやっぱりなにかちょっと違うところがありましたし、サファリパークなどの動物と触れ合える施設も探したんですが、あれ、僕、これやりたかったけと思うところがありました。なので、十勝に残ってなにか探そうと思っていたところで、ちょうどここのヤギ飼育の仕事を見つけたんです。最初はこんなに長くいるつもりもなく、働いている間にどこかほかのところが見つかるまで、みたいな気持ちで入社しました。

ここのヤギたちは温厚で人懐っこいのが特徴です。生まれたときから人が近くにいる環境ですからね。そうしたヤギの性格が、ここののんびりとした風景を作り出していると思っています。家畜の能力として考えると、決して優良なヤギとは言えないんですが、なんとかこの環境を生かしてより良い乳を搾り、美味しいチーズを作っていけたら……。穀物飼料をたくさんあげたり、畜舎を保温したりすれば冬でも搾乳できたりしますが、ここはそういうことはせずに自然のサイクルのままにしています。20年続けていると、夏が長くなっていたり、雪が湿った重たい雪になったりと気候の変化も感じていますが、そうしたなかでどうしたらヤギたちと共生しながらより良い仕事をしていけるか、そんなことを考えながら仕事をしていますね。

四季がはっきりしている、この場所での暮らしに向き合って

ここは僕が生まれ育った裏山とは全然違います。一番思うことは季節の移ろいを感じること。それはヤギたちと同じかもしれないですね。ヤギは気候の変化に敏感な生き物。ここは山が近いので雨が降りやすい。雨の気配はヤギたちと同じように僕も感じます。クマを見たことはありませんが、目撃情報があった日は、なぜかヤギたちはまったく外に行かないです。なにか気配を感じていたり、ふんがあったりするんでしょうね。それを敏感に察しているのかなと思います。僕は、季節がはっきりとしているほうが好きなので、夏は暑く、冬は寒い十勝の気候が良いですね。雪も大好きです。雪が降ることはお祭りみたいに感じています。ここでの暮らしのほうが長くなりましたが、今でも非日常を感じますね。

春はヤギのお産があって、一番忙しくて一番賑やかな季節です。出産ラッシュのときは3人のスタッフ総出で1日中、子ヤギの世話をしています。病気がないかとか、お母さんは大丈夫かとか。お母さんのおっぱいをきちんと飲まないと死んでしまうことがあるので、3人で手分けをして、飲んだやつは飲んだよと印をつけるなどして対応しています。最近はきちんとデータ化することに取り組んでいるので、どのヤギとどのヤギが親子関係かもわかるようにしておかないといけない。1日10頭ぐらい出産があるとすると、平均1・5頭なので、翌日には15頭の子ヤギがいるんですよ。2日で30頭になっていたり……。だから春は忙しい季節ですね。でも、トコトコついてくる子ヤギは可愛いですよ。

春は草花の芽吹くとともに子ヤギたちがたくさん生まれて、夏には青草をたくさん食べて元気に育って乳を出してくれます。最近は暑くなりましたが、この辺りはまだまだ山が近いので涼しいです。紅葉が進み秋が深まってくるとヤギたちも冬モードになります。そして、雪に覆われる冬。ここで動物たちと暮らしていると、自然の営みのサイクルのなかに入らざるを得ません。四季の移ろいを山からも動物たちからも感じながら仕事を続けてきました。数年前には御影駅の近くに家も建てました。列車の窓から楽しめるようにと花畑も作っています。なんだかんだ言って、自然とともにある暮らしをずっと続けているのかもしれないですね。

提供：中札内村日高山脈国立公園化PR事業実行委員会 事務局（地域おこし協力隊）町田　仁志

日高山脈を眺める無二の日々

『無二』に登場した日高山脈の山々

1 十勝幌尻岳 標高｜1,846m
帯広市と中札内村とにまたがる山。山名はアイヌ語で「大きな山」を意味する「ポロ・シリ」に由来する。通称「カチポロ」。

2 芽室岳 標高｜1,754m
日高山脈の登山史のはじまりとして、北大山岳部の松川五郎氏らが登頂したことで知られる山。眺めも良く、登りやすいことで人気。

3 ペケレベツ岳 標高｜1,532m
清水町に位置する山。「ペケレベツ」とはアイヌ語で「水が清い川」という意味を持つ。6合目辺りから登山道があるため、比較的登りやすい。

4 剣山 標高｜1,205m
清水町に位置する、日高山脈唯一の霊峰。低山ではあるものの、鎖場、梯子などが設置されているスリリングな山として知られている。

5 熊見山 標高｜1,175m
清水町に位置する山。日高山脈の原生林を流れ、サケやマス、シシャモが上る川としても有名な沙流川の源流としても知られる。

6 アポイ岳 標高｜810m
地球深部の情報を持つ「橄欖（かんらん）岩」できている、特殊な自然体系を持つ山。低標高ながら稜線部に高山植物が生育している。花の百名山の一つ。

※それぞれの山についての登山道の有無や通行止めの実施など、登山情報については、事前にお問合せの上ご確認ください。

ABOUT "MUNI"

表紙撮影：北波 智史

『無二』について

本冊子『無二』は、現在国定公園である日高山脈襟裳国定公園が2024年に国立公園化されることをきっかけに制作されました。

日高山脈の姿は、十勝の人々の心にある、暮らしのなかの当たり前の景色とも言えます。ですが、十勝に暮らしている人にこそ日高山脈のことを知ってほしい、より誇りに思ってほしい。そう考えたとき、日高山脈の麓で暮らし、日高山脈を愛する方々のお話をインタビューとしてまとめることが一番だと考えました。読者の皆さんにもそれぞれの「日高山脈の麓での暮らし」を思い浮かべながら、日高山脈に思いを馳せていただけたら嬉しいです。

表紙の写真は、帯広市内で撮影された、ビーナスベルトがかかった日高山脈の写真です。ビーナスベルトとは、日の出前や日没直後に，太陽と反対側の空にピンク色の帯が見られる現象。創刊号を意識し、日の出前の新しい日がはじまる、「1日の幕開け」をイメージしました。

ABOUT "MUNI"

日高山脈とは

日高山脈は、北海道中央南部を走る北海道唯一の山脈で、国内最大の国定公園でもあります。

幌尻岳を最高峰とする海抜1,500メートル～2,000メートル級の山々が連なり、氷河の痕跡「カール」、稜線の鋭く切れ込んだ「ナイフリッジ」などの地形が見られるのも特徴です。

日高山脈の山々には、整備された登山コースは多くありません。山に近づくには道のない沢を遡行しなくてはならないことも多く、アプローチも相当長いことから、人が立ち入ることを拒む厳しい姿がそこにあります。

国定公園として最大規模を誇る日高山脈は南北約150キロにわたり、十勝の多くの市町村から、その姿を眺めることができます。上記の写真の通り、全体が収まらないほどのその雄大な姿は、被写体としても人々を魅了しています。十勝から眺める日高山脈を見て「十勝の中でこの眺めが一番好き」「十勝に帰ってきたんだ」と感じる人が多くいるのです。

提供：久保 敬司

提供：奥谷 忠浩

編集後記

「日高山脈のある景色が好き」。
十勝に暮らす多くの人はそう感じているのではないでしょうか？その情景には、それぞれの物語があります。

「日高山脈には、十勝に暮らす人々の心を打つなにかがある。しかし、その価値や国立公園になる理由を言葉にすることができる人は、あまり多くないのではないか」。
そんな思いから本誌の企画がはじまりました。

この冊子では十勝に暮らす6名から、日高山脈に対する思いを語っていただきました。
『無二』の制作を通してより多くの人が「日高山脈を語れる」ようになれば、地域外の方にも自然とその価値が伝わっていくだろう。十勝に暮らす人は、その情景があることをより誇りに感じるだろう。インタビューを通して強く感じました。

国立公園化に向けた取り組みが動き出すなかで、大切にするべきことはなにか。
一歩立ち止まって、私たちの目に焼き付けられた日高山脈の情景を思い浮かべ、心の中にある価値を高めていくことではないかと思ってます。

この冊子には、わずか6人の語りしか収録できていません。
この地域には、無数の物語があることを私たちは知っています。
日高山脈について語り合い、誇りに思う。それを聞いた地域外の人が十勝に訪れたいと感じる。
そんな循環が、この冊子によって広がっていくことを願っています。

提供：仲野 裕司

無二 日常は日高山脈の麓に

発行日　2024年1月7日
発行元　十勝・日高山脈観光連携協議会
〒082-8651
北海道河西郡芽室町東2条2丁目14
（芽室町魅力創造課内）
TEL　0155-62-9736
編集元　一般社団法人トット道東
編集主幹　野澤一盛
編集・制作進行　須藤かおこ
吉田拓実（再考編集室）
アートディレクション　名塚ちひろ
デザイン　青砥美穂子（Bluepine）
タイトルデザイン　吉岡芽映
執筆　佐々木ののか
高山かおり（Magazine isn't dead）
外山暁子
撮影　野澤一盛
漆原成人（Rectokachi）
動画　漆原成人（Rectokachi）
高道悠生（Rectokachi）
校正　熊谷由美
佐東芽依
加藤葵依
写真提供　奥谷忠浩　亀田晃幸　北波智史
久保敬司　仲野裕司　山崎志津子
町田仁志
協力　日高山脈写真コンテスト

この冊子は、公益財団法人北海道観光振興機構による『令和5年度地域の魅力を活かした観光地づくり推進事業』により制作しております。

YouTube にて動画公開中

本誌に掲載した6名の方々のインタビューの様子をまとめた動画を『十勝・日高山脈観光連携協議会YouTubeチャンネル』にてご覧いただけます。日高山脈上空から撮影した美しいドローン映像などとともに、それぞれの方の表情や声から伝わる日高山脈への思いを、動画でもお楽しみください。

各自治体の観光に関するお問い合わせ

帯広市
とかち観光情報センター
0155-22-8600
〒080-0012　北海道帯広市西2条南12丁目 JR帯広駅エスタ東館2階
tokachitourist.hokkaido
Obihiro.Tourist.Convention.Association

中札内村
中札内村観光協会
0155-68-3390
〒089-1330　北海道河西郡中札内村大通南7丁目
nakasatsunai_kankou　nakasatsunaikan
nakasatsunai.kanko　@user-zr6yt8nw9j

清水町
十勝清水町観光協会
0156-62-1156
（清水町役場商工観光課）
〒089-0192　北海道上川郡清水町南4条2丁目2（事務局）
「北海道清水町観光協会」で検索
@ucchannel-shimizu

大樹町
大樹町観光協会
01558-6-2114(代表)
〒089-2195　北海道広尾郡大樹町東本通33（大樹町役場企画商工課内）
taiki_kanko　クールジャパンビデオ　アカウント名「大樹町観光協会」
taiki_kanko　https://cooljapan-videos.com/jp/user/m9tb0v42

芽室町
芽室町観光物産協会
0155-66-6522
〒082-0030　北海道河西郡芽室町本通1丁目19　めむろーど1階
（めむろまちの駅内）
koropokkuru　@709xyxop

広尾町
広尾町観光協会
01558-2-0177
〒089-2614　北海道広尾郡広尾町西4条7丁目1（広尾町役場水産商工観光課内）
hiroo_kanko　hiroo_kanko
hokkaido.hirookanko　UCO3wkB-u9FN_OC0sObRDX5A

十勝観光連盟（とかち晴れ）
0155-22-1370
〒080-0012　北海道帯広市西2条南12丁目 JR帯広駅エスタ東館2階
tokachi_kannkou_rennmei　Tokachibare_
tokachikannkourennmei　Tokachube

本冊子に関するお問合せ　十勝・日高山脈観光連携協議会［構成／帯広市、清水町、芽室町、中札内村、大樹町、広尾町］
0155-62-9736（事務局:芽室町魅力創造課）